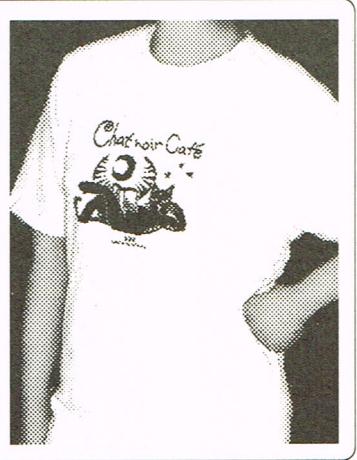


はジエンダーによって作られている。そのことを自覚すると、見たくない過去が浮かび上がる。それによって現在の価値理念もぐらつきだす。——「こういふこと」だった。

どうしたらよいのだろう。「男らしさ」という鎧を脱ぎ捨てて「自分らしさ」を求めるべきなのだろうか。だが、何が「自分らしさ」なのか。

こういふことは言えるように思う。——自分の中にこれまでのジエンダーからくるあるこわばりがでている。それをどのように自覚し、薄めていくか、そして、他者に開かれた方向にどのようにして自分を広げるか。男であること深めながら、そして自由の感覚も深めながら、他者と手をつなぐ方向はあると思うのだが。男であることが私の基本的条件なのだから、男であることと人間であることを同時に追求することは矛盾しないと思うのだが。

一冊の本を出したあとで、こんなに自分を考案できる経験はめったにない。この本に感謝したい。また、こういふ機会を与えてくれた『La Vue』にも感謝したい。手



●オリジナルTシャツ販売中●

Tシャツの季節到来です。な工房では、黒猫のデザインをあしらったオリジナルTシャツを販売中です。

「読者する黒猫」Tシャツ
定価2700円(税込)

サイズ:S/M/F

色は、ホワイトあるいはグレー

素材:綿100%(天竺編)ハイグレードタイプ、厚手のしっかりした生地です。

ご注文は、TEL/FAX 06-6320-6426
またはhttp://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/t-shirt.html でお願いします。

スポート

フットボールの進歩についての試論

ヨハン・クライフ頌

山口秀也

エリアの手前でボールをもつと、かれは陸上競技の短距離走者のスタートダッシュのように低い姿勢で、なんのためらいもなく目の前に群がるデイエンダーたちにむかってドリブルを開始した。大きく腕を振り、ひじを高くあげ、鋭角に折り曲げたひざが、一步、二歩と前へ突き出されるともうトップスピードにのつている。蹴り足がしっかりと、また長く芝を捉えていて、立ち足から頭にかけてのラインを直線的に見せていく。その瘦せたからだは一本のマッチ棒のようにも見え、いまにも倒れそうなほどするほど傾斜している。つぎの瞬間、デイエンダーから矢継ぎ早に繰り出される足を、やすやすとパスしていく。この間しかもしもっともおどろかされるのは、高速で人のあいだをドリブルでスラロームするさうい、デイエンダーにならんだ瞬間にスピードが上がることだ…。

私が目にしたのは、一九八〇年の神戸中央競技場での光景であり、かれとは、当時ワシントン・ディプロマッツの一員として来日した「空飛ぶオランダ人」ヨハン・クライフである。

クライフは、60年代後半から70年代にかけて、そのキャラクターを開始したオランダのアヤックスでのヨーロッパチャンピオンズカップ三連覇、世界に衝撃をあたえた74年の西ドイツでのワールドカップ、スペインに渡つてのバルセロナでの成功と、あらゆる名声につつまれた隆盛期のうち、78年のワールドカップを「家族とすごす時間を何ヶ月もサッカーにとられたくない」との理由で(軍事政権下の開催国アルゼンチンにいたするボイコットという説もあるが)いともあつさりと辞退、アメリカに渡つてたしか二年目くらいだったようにおも

ーマンスを見せられたときの興奮は、いきなり地回りのやくざをつぎつぎと切り捨てる。面倒くさそうに懐手で立ち去る映画「用心棒」の三船敏郎を見たときのあの高揚感にも似た圧倒的なものだった。おもにサッカーの専門雑誌をとおしての情報に頼らざるをえない当時のサッカー少年は、グラビア写真であつてなお躍動感あふれるドリブルが、じつさいに目前で行われているという事を、しばらくのあいだ受け入れることができなかつた。

いまにも前のめりに倒れそうな体勢で、デイエンダーの横をすり抜ける瞬間「キウン」とターボエンジンを加速させる。その加速だけをとてみると、94年アメリカワールドカップの英雄ブラジルのロマーリオにも共通するものがいる。かれのばあい「それが発揮されるのはおもにペナルティエリアの中である。ロマーリオは最終ラインのディエンダーの前でボールを受ける(じつさいそこまではさしたる仕事をしていない)と、ターボエンジン」とディエンダーを振りきり、浅い角度でペナルティエリアを右斜め前方に横断する。あとは丸腰のゴールキーパーをあざ笑うかのようにボールをゴールに流し込むだけである。それにくらべてクライフのそれは、センターサークルのあたりでも頻繁に披露される。スタジアムあるいはテレビで俯瞰していると、フィールドが切り取られるような感覚にとらわれるほどに切れ味があつた。かれのドリブルによつて、フィールドという空間が鋭利な刃物で切り裂かれ、同時に、かつて「チカラしたボールまわし」であったヘットボトルとよばれていたものの、が、その意味ごと抉り取られるのである。

クライフが

体現したドリブ

ーランスを見せられたときの興奮は、いきなり地回りのやくざをつぎつぎと切り捨てる。面倒くさそうに懐手で立ち去る映画「用心棒」の三船敏郎を見たときのあの高揚感にも似た圧倒的なものだった。おもにサッカーの専門雑誌をとおしての情報に頼らざるをえない当時のサッカー少年は、グラビア写真であつてなお躍動感あふれるドリブルが、じつさいに目前で行われているという事を、しばらくのあいだ受け入れることができなかつた。

いまにも前のめりに倒れそうな体勢で、デイエンダーの横をすり抜ける瞬間「キウン」とターボエンジンを加速させる。その加速だけをとてみると、94年アメリカワールドカップの英雄ブラジルのロマーリオにも共通するものがいる。かれのばあい「それが発揮されるのはおもにペナルティエリアの中である。ロマーリオは最終ラインのディエンダーの前でボールを受ける(じつさいそこまではさしたる仕事をしていない)と、ターボエンジン」とディエンダーを振りきり、浅い角度でペナルティエリアを右斜め前方に横断する。あとは丸腰のゴールキーパーをあざ笑うかのようにボールをゴールに流し込むだけである。それにくらべてクライフのそれは、センターサークルのあたりでも頻繁に披露される。スタジアムあるいはテレビで俯瞰していると、フィールドが切り取られるような感覚にとらわれるほどに切れ味があつた。かれのドリブルによつて、フィールドという空間が鋭利な刃物で切り裂かれ、同時に、かつて「チカラしたボールまわし」であったヘットボトルとよばれていたものの、が、その意味ごと抉り取られるのである。

本人“という枠をはずし、世界的なパースペクティブでサッカーを解釈した結果、ある意味、現代サッカーのもつとも忠実な具現者となる。中田は、クライフの“好み”とはいえない。ゆるぎない戦術の運用に長けるプレーではなく、あくまでクライフの好みは“ボールプレーヤー”である。いくつもあるゴールまでの道筋から、カーナビゲーションシステムがさしめす“正しい道順”どおりにボールを動かすのではなく、巧みにボールと戯れ、ゲームにスペクタクルをあたえることのできるプレーのやうだ。鹿島アントラーズの若きドリブラー本山雄志はまさにそんなプレーのやうだ。99年のワールドユースでも活躍したので、ことによるともうクライフの目にとまつているかもしれない。本山のフットボトルとよばれていたもののが、その意

味ごと抉り取られるのである。

クライフが、そのたぐいまれなドリブルによつてはしい。スランプにおいている愛息ジョルディ(しなやかなドリブルは父親譲りである)よりは将来性はきっとあるとおもふのだが。(つづく) クライフ

や横浜Fマリノスの中村俊輔のような有望な若いプレーヤーにたいして、すぐに中田英寿の成功をひきあいに出して筋力、体力の強化を云々するのは画一的にすぎる傾向であるようにおもわれる)

クラウドが、そのたぐいまれなドリブルによつてサッカーにもたらしたものは技術的な進歩だけにとどまらない。それは当時ヘトタルサッカーとよばれていたあたらしい概念である。

ゲームにおいて、クライフのドリブルあるいはかれを起点としたパスの交換によつて起ころ、フィールドのそこかしこで生じた小さな渦は、ひとつのがくを貫く時間、あるいはフィールドという空間に穴を穿つ。そこに構築的な意志は存在せず、分節化された断片の集積を見いだすのみである。しかし小さな渦はやがて大きな流れに収斂しサッカーというゲームを形作る。それは“理性的”な当時のサッカーにとつては革命的、といつよりも理解不可能なしろものだつたにちがいな

つくした(とおもえる)現代サッカーがはたして進歩したといえるのか。この問題には容易に答えることはできない。しかしすでにクライフは、現役時代はみずからプレーで、監督時代には、そのチームづくり、戦術でその問いに答えているのである。その答えは簡単だ。選手には、肉体的な強度よりも、細くてしなやかなバネ、そしてなにより確かな技術を求める。そしてチームには、勤勉なランニングと過度な高速プレーよりも、基本的な技術をなおざりにしないサッカーを求める。

クライフはすぎた“勝利至上主義”(これと商業主義化はいまやスポーツ全体の問題である)がもたらす守備偏重のサッカーを極端に

きらう。おなじ1点差でも1対0の試合よりもビデオ中田のことではない。みずから日本“という枠をはずし、世界的なパースペクティブでサッカーを解釈した結果、ある意味、現代サッカーのもつとも忠実な具現者となる。中田は、クライフの“好み”とはいえない。ゆるぎない戦術の運用に長けるプレーではなく、あくまでクライフの好みは“ボールプレーヤー”である。いくつもあるゴールまでの道筋から、カーナビゲーションシステムがさしめす“正しい道順”どおりにボールを動かすのではなく、巧みにボールと戯れ、ゲームにスペクタクルをあたえることのできるプレーのやうだ。鹿島アントラーズの若きドリブラー本山雄志はまさにそんなプレーのやうだ。99年のワールドユースでも活躍したので、ことによるともうクライフの目にとまつているかもしれない。本山のフットボトルとよばれていたもののが、その意味ごと抉り取られるのである。

クライフが、そのたぐいまれなドリブルによつてはしい。スランプにおいている愛息ジョルディ(しなやかなドリブルは父親譲りである)よりは将来性はきっとあるとおもふのだが。(つづく) クライフ

フは、ただひたすらにゲームにスペクタルをはじめつづけた。

最近、クリフが実践したトータルサッカーの視線の先に実を結んだかに見えた現代サッカーを称揚しつつ、なぜか「フットボールははたして進歩（進化）しているのか」という自問に、答えられなくなっている自分に気づく。バルセロナの会心の勝ち試合がつまらなく感じられることがあるのである。それにたいする細かい考察は稿をあらためるとする。しかし、いま見てきたように、現代の最先端のフットボールに、クリエイフの標榜するそれを対照してみると、おぼろげながらその茫とした疑問にかたちがあたえ

られるような気がする。現代のフットボールには、勝利のテクノロジーを追求する機能美は感じられても、それはけつきよくのところ、愚直にゴールに邁進する前近代的な勝利への意志とまったく異なるのではないではないか。ゴールへのまわり道、ゴールへのプロセスそのものにたいする追求、平たくいえばサッカーの原初的な「おもしろさ」への情熱が失われているのではないか。

これらの疑問に答えることなしには、安穏と二〇〇二年をむかえるわけにはいかないような気がする。また、そのためにクリフがその手がかりになるような気がして、古びた「記憶のなかのクリフ」を懐かしさとともに取り出してみたが、当時の自分のへばプレー

■ (やまuchi・ひでや) 一九六三年京都市生まれ。小学4年のころから球蹴りを嗜む。現在もトレーニングのため腹部に砂袋(脂肪)を詰め込みプレーする。他の関心領域は音楽、映画、食文化。「哲学的腹ペニチ」塾生。出版社勤務。

【参考にした本】

細川周平「ヨハン・クリフあるいは斜線の戦略」(『サッカー狂い 時間・球体・ゴール』所収、哲学書房、1989)
ジョアン・ビ「ヨハン・クリフ 勝者(ガナドール)の魂」(『スポーツ20世紀 駆る「スポーツの世紀」の記憶 VOL.1』所収、ベイスボールマガジン社、1999)

商品の呪術的性格の脱魔術化に向けて

思想

1 マルクス、その歴史の認識論的平面

マルクスにについてこれまであまりにも多くのこと書かれてきたし、恐らくこれからも、多くのことが語られることは間違いない。しかし、ある程度のバランスをもつてマルクスのテクストを眺め、そのテクストについて何かを書こうとするとき、困難さに直面し、語るべき言葉を喪失した状況へと追いつまれる。それは、マルクスについて決定的なことが書かれてしまつたからでも、それが、歴史的に古いからでもないだろう。東欧の崩壊や労働運動の衰退といつたこととマルクスのテクストが関係しているとしても、マルクスを読むことへと人を誘う風向きが変わった程度のことと過ぎないからである。弁証法的に考えることに慣れたものなら、むしろ、こうしたマルクスを巡る否定的なものなかで、マルクスについて立ち止まり考えることが、まさに、テクストをよみがえらせる魔法の力であることにだけ、自らの真理」(『精神現象学』)を得ているのである。マルクスの『資本論』とりわけ、その「商品と貨幣」の章を読むことの困難は、今も昔も同じであつて、それが、「光明で凡庸」で「無内容」で簡単であり、それを私たちちは、「知っている」ように思えていた

にも拘らず、それを分析しはじめるときま「形而上学的な屁理屈や神学的な小言」で一杯であることが示されるということで言い表されている。商品が何であるか知ることは、マルクスが言うように、商品の構造的なネットワークによって商品形態に書きこまれた「象形文字」を解読することにほかならないのだが、そのためにはそれなりの注意深さが必要になつてくるのである。

マルクスのテクストを読むさいに、マルクスがいかなる認識論的な前提を立てていたかと問うことは無駄ではない。マルクスが、『資本論』序文で、私たちにあらかじめ語つていることによれば、社会経済構成の発展を自然造にみていることを評価しつつ、一方で、アリストテレスが価値の概念を考えられなかつたことを批判する。アリストテレスは、「五台の寝台」「一軒の家」と交換される際に、二つの商品の間に、通約可能性がなければ、等価が不可能であることを指摘しながら、しかし、その二つの商品に内在している通約可能、すなわち価値を見出すことなく分析を中断してしまつたとされる。認識の歴史的平面を問題にするわたくしたちが注意すべきなのは、アリストテレスが価値概念の分析を失敗したことを理由づけるマルクスの仕方である。

マルクスは、人間の同等性が「民衆の先入見」として強固なものとなつてゐる社会において、はじめて、価値形態の「秘密」が解かれるのであると書いている。ここで、民衆たちは、もちろん、プロレタリアートのことである。マルクスはまさに『資本論』を労働者たちに向けて書いており、近代のプロレタリアートは、価値形態の秘密をアリストテレスほどの巨人でさえ、読み取ることが出来なかつたのに読み取ることができると信じているのである。プロレタリアートは、生産物が、人間の労働によって、産出されることを知つてゐるからというわけである。しかし、もちろん、マルクスは、いわゆる、価値形態論が、難解であることも同時に認めていて、二千年の歴史のなかでも未だに解明に成功していない部分があることを知つてゐる。だが、価値形態の秘密は、無内容で簡単なのである。

マルクスによれば、アリストテレスが哲学において決定的な問題が参考になるだろう（同時期に書かれたいわゆる「ミル評注」も研究史的には重要であるが、ここでは扱わない）。マルクスにとって、貨幣への関心は、初期から一貫して、その神秘的で呪術的な力の秘密を分析することにあつた。マルクスは、パリで書かれた『経済学・哲学草稿』の第三草稿において、貨幣論を展開しており、そこで、シェイクスピアの『アテナイのタイモン』から以下の部分を引用している。

マルクスによれば、アリストテレスが価値表現の秘密を読み取ることができなかつたのには、彼が奴隸労働を基礎とした社会に存在したこととに規定されて、人間労働の不等性を自然的基礎としていたからである。ここに書かれていたことを読み取ることは、一見するほど容易なことではない。ここには、マルクス独特の批判の様式とそして、まだ、経験的な批判が込められているからである。

マルクスは、人間の同等性が「民衆の先入見」として強固なものとなつてゐる社会において、はじめて、価値形態の「秘密」が解かれるのであると書いている。ここで、民衆たちは、もちろん、プロレタリアートのことである。マルクスはまさに『資本論』を労働者たちに向けて書いており、近代のプロレタリアートは、価値形態の秘密をアリストテレスほどの巨人でさえ、読み取ることが出来なかつたのに読み取ることができると信じているのである。プロレタリアートは、生産物が、人間の労働によって、産出されることを知つてゐるからというわけである。しかし、もちろん、マルクスは、いわゆる、価値形態論が、難解であることも同時に認めていて、二千年の歴史のなかでも未だに解明に成功していない部分があることを知つてゐる。だが、価値形態の秘密は、無内容で簡単なのである。

マルクスによつてシェイクスピアのこの作品が重要であったのは、シェイクスピアが、貨幣が黄金の羊として目に見える神であつて、「諸事物の全般的な倒錯と転倒」を把握し、貨幣が一般的な娼婦として人間と諸国民一般の取り持ち役として機能し、人間的な性質を転倒させ、倒錯させることを把握したからである。この時期のマルクスによつて貨幣とは、「人間の疎外された類的本質」であり、「人類の外化された能力」として把握されたものである。貨幣は、「倒錯と置換」を本質

認識の

認識の

認識の平面において、社会構成体の歴史性が認識の対象となる社会の歴史性、すなわち、時間性を問題にしているのである。それは、把握の形態において捉えるのだと言う。第2版の後記では、それをさらに、「過ぎ去る面」から捉えるのだと書いている。マルクスは、なく、つねに、変化の過程にあるものとする認識の過程と捉え、社会が固定されたものではなく、人間労働として、したがつて同等と認められるものとして表現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものと見なす。アリストテレスが価値概念の分析を失敗したことを理由づけるマルクスの仕方である。

マルクスによれば、アリストテレスが価値表現の秘密を読み取ることができなかつたのには、彼が奴隸労働を基礎とした社会に存在したこととに規定されて、人間労働の不等性を自然的基礎としていたからである。ここに書かれていたことを読み取ることは、一見するほど容易なことではない。ここには、マルクス独特の批判の様式とそして、まだ、経験的な批判が込められているからである。

マルクスは、人間の同等性が「民衆の先入見」として強固なものとなつてゐる社会において、はじめて、価値形態の「秘密」が解かれるのであると書いている。ここで、民衆たちは、もちろん、プロレタリアートのことである。マルクスはまさに『資本論』を労働者たちに向けて書いており、近代のプロレタリアートは、価値形態の秘密をアリストテレスほどの巨人でさえ、読み取ることが出来なかつたのに読み取ることができると信じているのである。プロレタリアートは、生産物が、人間の労働によって、産出されることを知つてゐるからというわけである。しかし、もちろん、マルクスは、いわゆる、価値形態論が、難解であることも同時に認めていて、二千年の歴史のなかでも未だに解明に成功していない部分があることを知つてゐる。だが、価値形態の秘密は、無内容で簡単なのである。

マルクスによつてシェイクスピアのこの作品が重要であったのは、シェイクスピアが、貨幣が黄金の羊として目に見える神であつて、「諸事物の全般的な倒錯と転倒」を把握し、貨幣が一般的な娼婦として人間と諸国民一般の取り持ち役として機能し、人間的な性質を転倒させ、倒錯させることを把握したからである。この時期のマルクスによつて貨幣とは、「人間の疎外された類的本質」であり、「人類の外化された能力」として把握されたものである。貨幣は、「倒錯と置換」を本質

とし、「愛を憎に、憎を愛に、徳を悪徳に、悪徳を徳に、奴隸を主人に、主人を奴隸に、愚鈍を理知に、理知を愚鈍に変ずる」魔法の力である。

シエイクスピアの『アーネスト・タイモン』

の呪術的な力というテーマは、「資本論」に至るまで、一貫したものである。しかし、マルクスは未だ、貨幣の本当の恐ろしさを知るに至っていないのである。『アーネスト・タイモン』は、まさに貨幣=黄金を巡る戯曲である。タイモン公から黄金を引き出せる間だけ、彼の友人たちは、友人としてふるまい、そして、タイモン公の友情によってさまざまの恩恵を受け金品を贈与され、彼の財産によって危機に陥った友人たちは命を救われ、タイモン公の援助によって事業を成功させることになる。そして、タイモン公のそのような人の良さは、友人たちを最大限にもてなす浪費につぶやき結果し、当然のように、彼は破産する。タイモン公が、破産したあと、彼のもとから、金の切れ目が縁の切れ目といわんばかりに他人のようになつて友人たちが去っていく。そして、タイモン公は、発狂するほど憂鬱者となつて、かつての友人たちと世界を呪詛しつつ、無意味に死んでいくという物語である。タイモン公が発狂した理由は、自身がお金によって、友情と信頼と名譽を買つていたことを知つてしまつたからである。そして、タイモン公は、同じことしか言わなくなり、わけのわからない異言を語り、そして、悲しみのなかで、世界に対する支えを失つてしまい死に至るのである。

しかし、マルクスは、『経・哲草稿』においては、貨幣の神的で呪術的な力の本質が、「倒錯と置換」にあることを認識しつつも、貨幣の謎が、それを理解するやいなや、人々のものであることを把握していなかった。若きマルクスにとって、貨幣とは、人間の疎外された力であるとされ、理性によつて、あらかじめヘーゲルの亡靈に取り憑かれたように形而上学的に回収されてしまうのである。マルクスは、人間の類的本質という形而上学的な前提を実体的に保存しつつ、貨幣の謎を把握しようとしたために、貨幣の気狂いじみた本質を把握しそこなつたのである。貨幣は、人間の言葉とは、別の言葉、すなはち「商品語」で

話しており、その言葉が理解可能になつたとき、タイモン公は、狂氣へと駆りたれ、人間界を呪つて、その世界から姿を消してしまつたのである。マルクスの『資本論』と『経済学・哲学草稿』との差異はまさにここにおかれており、『資本論』においてマルクスは、貨幣を「人間の疎外された力」という歴史を欠いた形而上学批判しているのである。

3 商品の呪術的性格

マルクスの『資本論』における決定的な転回点を明かにするには、マルクスが「商品語」とか客観的思考形態と呼ぶものに注意して商品論を読む必要がある。しかし、まず、「経・哲草稿」の頃から受け継いだ貨幣の「置換と転倒」というテーマを『資本論』において確認してみよう。マルクスはヘーゲルの精神現象学の反省規定という概念を借りて次のように書いている。

「およそこのような反省規定というものは、奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼に対して臣下として振舞うからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。」『資本論』

ここには、「倒錯と置換」の構造が現れている。王が王であるのは、自然的な属性であつて、その自然性において、神から受け継いだ神祕が宿ており、その神的な力を行使するがゆえに、彼は、アダムの直系の子孫である王として振舞うことが出来るなどと、人が、考えるとき、人の認識は倒錯し、歴史的に起源を持つことによって、人間の平等という民衆の先入見的な概念を実現し、そして、それが、そのまま「客観的な思考形態」となり、民衆の先入見的な内容的な認識へと「翻訳」されたものなのである。この思考形態は、もちろん、外にある思考形態として商品交換の形式そのもののことである。だとすれば、貨幣の魔力の秘密はどう考えるべきだらうか？ マルクスは、「單純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである」と書いている。「倒錯と置換」を本質とする貨幣の神祕は、單純な商品形態に存在しているのである。そして、商品形態の謎のような性格は、どこに存在しているのか？ マルクスの答えは、「明らかにこの形態そのものである」というものである。

わたしたちが、価値形態の秘密を捉えるとき、価値形態の内奥の深遠な本質を把握しようとするのではなく、その表面的なネットワークを捉えなければならない。価値形態の秘密は、深層にあるのではなく、まさに、その価値の形態そのものというあからさまな表面に隠されているからである。リンネル=上着という等式を成立させそれを価値の形態において捉えるとき、リンネルは、上着に等価されることによって、価値として等値されていることになる。しかし、このとき、リンネルは、上着の使用価値という自然的形態それ自体を自己の価値の現象形態として把握する

提供するのである。そうした意味で、わたしたちは、「生産過程を支配していない社会構成体に属する」がゆえに、生産過程の基礎に存在する交換の形式によつて、「客観的思考形態」を規定しているのである。

マルクスが「客観的思考諸形態」と言ったとき、それは、例えば、古典経済学の諸カタテゴリーを意味している。経済史が明らかにするよう

ここで、すでに、王と臣下の反省規定の弁証法においてと同様に、「倒錯と置換」が生じていることに注意しなければならない。すなはち、リンネルの価値が表現された上着は、その上着のごわごわした自然的な物的形態そのものに価値が表現されているのだから、価値がリンネル=上着の反省的な関係の結果として存在するにもかかわらず、はじめから、上着の自然属性として価値が内在しているかのようないかに錯覚を人に与えるのである。この等価において、人間の労働の形態も変化していくことを指摘しておく必要があるだろう。すなはち、リンネルや上着を生産した個別的な具体的な労働が、等価において抽象的な労働へと還元され、すなはち価値へと抽象されて交換可能となるのである。この抽象は、生産過程に存在する具体性を人間から覆い隠す。

ここで重要なのは、この形式そのものは、主観的思考の条件として存在する思考の形式なのであって、それは、人間の思考の外に存在しておらず、それは、人間の思考の外に存在しておらず、いわば、無意識の言語、あるいは、商品語であるということである。

4 リンネルは「思想を

リンネルにだけに通じる言葉で、つまり商品語で言い表すだけである。労働は人間労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいとされるかぎり、つまり価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働からなつていて、と言うのである。」『資本論』

マルクスにとって、商品が商品語を話す

いうのは、まさに、資本主義社会を組織する社会構造の編成の根源に拘ることである。

「彼らは意識しないが、そう行う」とマルクスが述べるとき、人間が自らの意志で、社会関係を組織するのではなく、商品が人間の代わりに人間関係を組織するということを述べているからである。マルクスは、まさに、こ

懸けの飛躍の結果が存在するものである。商品の交換が可能かどうかは、交換されてみないとわからない「信」に拘ることなのである。わたしたちは神学的宇宙に存在する。

価値は「形態の効果として生成するものであつて、個別の商品の自然属性として価値が内在するわけではない。例えば、バブル崩壊以後、リストラに遭遇したサラリーマンの価値は、会社に必要なないと判断されたとき、それまでに彼に内在した「かのよう」に見える交換価値を喪失してしまつたのである。バブル崩壊以後に生じている信用制度の失墜は、土地の神話とは、土地があたかも自然属性として単位面積あたりの交換比率が年々上昇し、投機的な価値を持つて「かのよう」に見える神話の崩壊としてはじまったのである。土地投機のために、貸し付けしたりした、資本が、回収不能になり、借金を返済するために、大量に株式が放出され、その結果、株価が下落し、ますます企業の資金調達が困難になり、経営規模の縮小に迫られ、そして、企業が大量の雇用を調整する必要生まれ、リストラされた失業者たちの大量発生によって、経済の有効需要が縮小し、経済がスパイク式に縮小した結果、現在の状態に至るのである。商品に価値が自然属性として内在しているのではなく、それが、「命懸けの飛躍」によって、交換された結果、価値が内在している「かのよう」に見えると、いう分明な認識を積極的に忘却することによつて、成立するのが、投機バブルであつたといふわけである。

日常的な自然意識にとって、商品は、貨幣表示され、それは、販売可能であるという認識が存在している。貨幣表示された商品は、「信」を生きているわけである。毎月のサラリーやリストラを宣告されたとき、まさに、貨幣表示されており、「交換可能性」が「信」として保障されているということである。この「信」は、彼にとって、外にある思考形態の「信」であつて、自身の価値を客観的に自己が把握していないことが多いのだ。

新聞やテレビが伝えるように、現在、リストラに遭遇した中高年の自殺が増えているのも、彼の「信」が商品の「信」であつて、彼がリストラを宣告されたとき、タイモン公のように貨幣の秘密を知ることになるからかも知らない。彼らは自明性のままでてきた。日常性そのものをリストラにおいて、いわば

るべきではない」と書き出し、以下えんえんとその理由を説明してゆく。『精神現象学』という哲学書の序文が、「哲学書に序文を書くべきでない」という主張から始まるのだから、驚く。そういながら序文を書いているとは一体どういうことなのだ。

二つの 解釈がある。ひとつは常識的なもので、ヘーゲルは書いているうちに筆の勢いで思わず反対のことををしてしまったということである。自分の主張を自ら裏切ってしまった、というわけである。だ、と考えると多少は興味が出る。思考は、思考 자체の力で反対物に転化する。「哲学書に序文を書くべきでない」というテーゼが、ヘーゲルの思考の進展によつて「やつぱり序文は書くべきだ」というアンチテーゼに至つた、ということだ。

だが、第二の解釈のほうがはるかに面白く、私はこちらの見解に賛成である。冒頭の一句は、正確には「哲学書に序文をつけるべきではない」というものである。「…ように思える」(It seems that...)と「…のように思える」(It seems that...)というのが曲者である。「…ように思える」には、「しかし、本当はそうではない」という含みがある。世間の者たちにはそう思えるかも知れないが、私||ヘーゲルはそうは思わない、というのが真意である(牧野紀之の解釈)。すると、あとの流れはこうなる。さて、これからしばし、世間のやつらの考えに付き合つて、その主張を展開してみよう。そうして、最後に、やっぱり序文が必要だということを示そう。世間で序文が不要だと思われてしまつたのは、これまでに世にある序文がダメだったからなのであって、私がこれから模範的な序文を書いてお目にかけよう、という論理の流れである。この解釈は、見事に論理的整合性が取れている。しかし、残念なことにヘーゲルははつきりとそう書いてくれていない。この解釈は行間を読んだ結果なのであって、原文からは、どちらが正しいとも言ひ難いのである。全くもってヘーゲルの文章のダメなゆえんである。

私が、後者の解釈のほうに賛成する理由は、こう解釈すると、ヘーゲルの批判方法の特徴が浮き彫りにされるからである。ヘーゲルは、あるものごとを批判しようとするとき、直接けなすことはあまりしない。「誉め殺し」という手をよく使う。「Aは、なるほど素晴らしい、これこれの点でも妥当だ。もつと言えば、これこれ

るべきではない」と書き出し、以下えんえんとその理由を説明してゆく。『精神現象学』という哲学書の序文が、「哲学書に序文を書くべきでない」という主張から始まるのだから、驚く。そういながら序文を書いているうちに筆の勢いで思わず反対のことをしてしまったということである。自分の主張を自ら裏切ってしまった、というわけである。だ、と考えると多少は興味が出る。思考は、思考 자체の力で反対物に転化する。「哲学書に序文を書くべきでない」というテーゼが、ヘーゲルの思考の進展によつて「やつぱり序文は書くべきだ」というアンチテーゼに至つた、ということだ。

だが、第二の解釈のほうがはるかに面白く、私はこちらの見解に賛成である。冒頭の一句は、正確には「哲学書に序文をつけるべきではない」というものである。「…のように思える」(It seems that...)と「…のように思える」(It seems that...)というのが曲者である。「…のように思える」には、「しかし、本当はそうではない」という含みがある。世間の者たちにはそう思えるかも知れないが、私||ヘーゲルはそうは思わない、というのが真意である(牧野紀之の解釈)。すると、あとの流れはこうなる。さて、これからしばし、世間のやつらの考えに付き合つて、その主張を展開してみよう。そうして、最後に、やっぱり序文が必要だということを示そう。世間で序文が不要だと思われてしまつたのは、これまでに世にある序文がダメだったのである。全くもってヘーゲルの文章のダメなゆえんである。

の論点からもよい(さすがに世間ではそこまで考えてAをよしとする意見はないようだが、私はこの点も補足すべきだと考える)等々)こうやつて、賛成意見を出がらしにさせておいて、トドメの一撃を加える。「Aがよい」という理由はこれで全てである。といふことは、それ以上の良さがないということだ。だから、Aは限界がある。これこそが、ヘーゲル弁証法と呼ばれるものの極意なのである。序文の要・不要の議論は、まさしくこのやり方である。哲学書には序文が要らない、という理由をえんえんと述べてゆく。そうしておいて、最後のドターン場でひっくり返すのである。

さて

「弁証法」という言葉を出してしまった。有名な哲学用語なのだが、きちんと(というより、さしあたりの)定義をすべきである。先の文脈で使つた意味は、「ものを考へるときに知らず知らざるのまま」(現にヘーゲル自身、ちよつと先の方で、「ものを考へる際に、これがのくせがつくとよくな」とか「これのくせをつけるべき」という言い方をしている)。

推理小説からだいぶズレてしまつたようだ。最初の一一行の謎解きだけで、これだけの分量を使つてしまふのだから、この先どれだけかかるか知れたものではない。そこで、一気に『精神現象学』のプロットの全体構成を問題にすることにしたい。

プロットの

巧妙さは、推理小説の命である。これは、「あることをやつきてしまつて主張している」と、そのうちに逆のことを言い出してしまう「…」というものであつた。これを難しく言えば、「發展の頂点における対立物への移行」とでもいうことになる。だが、このことは別段大したことではなく、とうてい學問とか理論とか呼べるほどの中身ではない。日常生活でもよく経験することにすぎない。だから、この意味での弁証法は古代ギリシャでも自觉されてきた。例えは、プラトンの対話篇『プロタゴラス』にその例が見られる。これは、若き日のソクラテスがソフィストの大家であるプロタゴラスを相手に丁々発止と論戦する、という内容であるが、論争しているうちに、二人の主張を入れ替わつてしまつたのである。さすがのソクラテスも、といふほどである。

『精神現象学』の全体構成も、これと同様勝負である。さながら迷宮のごときである。物語の大団円、エピローグにあたるのが「絶対知」という章である。『精神現象学』のストーリーは、この大団円を目指して一直線に進行する。ところが、さあ、いよいよ解決編だ、というところで、劇中劇が挿入され、話が寄り道することになる。この寄り道が曲者で、今まで以上の長さと迫力を展開される。さて、この寄り道もいよいよ終わりに近づき、やつと本筋に戻れそうだ、というところで、更なる寄り道が開始され、これまたこれだけで優に大長編の風格があるのである: という具合である。寄り道のストーリーの中では以前に語られたエピソードが再び顔を出してくる。この話は前に聞いたはずだ、次にこうなるのだろう、ほら、そうなつた: という調子だ。まるで、元のところに戻つてしまつたようである。すつかり面食らつて、惑わされてしま

論法は、これこそヘーゲルの独自開発したものである。あるものを取り上げておいて、そのままの良さをとことんしゃぶり尽くしてしまい、カスにしてしまつてから、ポイと投げ捨てて、乗り越える。このやり方をヘーゲルは「アウェーベン(止揚)」と呼び、新しい哲学用語として提唱した。この点がヘーゲル弁証法と彼以前の弁証法との大きな違いである。実際に、ヘーゲル弁証法の神髄は「誉め殺し」論法にあり、といえるのである。考えてみればよい。この論法を自在に駆使するには、相手の主張の可能性を全て読み切つて、さらにその先を考へる地平に立つことができる。はじめてこの論法が可能なのである。ひたすら勉強するしか能のなかつた鈍才ヘーゲルにして考案した必殺技なのである。

推理小説からだいぶズレてしまつたようだ。最初の一一行の謎解きだけで、これだけの分量を使つてしまふのだから、この先どれだけかかるか知れたものではない。そこで、一気に『精神現象学』のプロットの全体構成を問題にすることにしたい。

「承認を求める生死を賭けた闘争(主人と奴隸)」という話がある。これがどうも本筋になってしまふ。長い独白が終わつて、地の文章に移り、作者が顔を出して語りはじめたのか。それとも、独白はまだ続いている、そのまゝにか立ち消えになつてしまふ。では終わつたのかと思うと、思いがけないところで、続きたかと思うと、決して忘れてはいけないので。そうかと思うと、突然に「人相術」にも解釈可能である。

「骨相術」などという不可解なエビソードが現れる。なんで、こんなところで、こんな話が飛び出すのか。著者は狂つているとしか思えないのだが、ふと冷静になつて、距離を置いて眺めると、まさにかかるべきところにかかるべき話題として、差し挟まれていたのだ。ということが分かる。著者は、どこまでも論理的なのである。

あまりにもすさまじいラビリンスなので、私はマップ作りをすることにした。パソコンのロール・ブレイング・ゲームによくある「なんとかダンジョン」というたぐいのゲームを攻略するときの手である。この『精神現象学』のマップ作りは、楽しい苦労であった。まさしく、ミステリーの楽しさそのものなのである(現在、私の手元には完成したマップがある。元素の周期律表のような形のもので、話題の相互関係と話の流れが分かるようになります)。

『精神現象学』は、このビルドゥングス・ロマン(教養小説)である。これは学会で認められた定説である(ゲルの「定説」ではない。先に述べた「ユーモア読み物」説と「推理小説」説は、私の独自見解なので、高橋グローブの「定説」と同類だと言われるかも知れないが、このビルドゥングス・ロマン説は多くの学者が認めている)。この文学形式を念頭に置いてみると、「精神現象学」は理解しやすいのである。

3

『精神現象学』は、大河ドラマである。よ

り正確に言えば、ビルドゥングス・ロマン(教養小説)なのである。ビルドゥングス・ロマン(教養小説)とは、西洋の「私小説」

ともいってきている。日本

「私小説」とは若干趣が異なつていて、日本版の「私小説」は、貧乏と病氣と女で苦労し

た体験談に代表されるようなケチ臭いものがほとんどである。しかし、西洋版「私小説」は、もっと氣宇壮大なものである。主人公が

作者の分身であり、主人公の振る舞いには作者の体验が影を落としている。では、「精神現象学」の主人公は何といふ名なのかな。何を隠そう、「意識」ないし「精神」である。ヒロリーは肉体を持たぬ抽象的な存在であるが、これは哲学書だから致し方ない。

物語は、主人公の誕生から始まるのが普通だ。生まれたばかりの嬰児にとって、周囲の世界は薄明のごとく混沌としている。そのうち、ものの見分けがつくようになり、事物と事物の関係が意識に上つてくるようになる。

見るもの、聞くもの、「なぜ?」「どうして?」と尋ねては大人を困らせる時期になる。ここまでが、『精神現象学』でいうと「感性的確

しかも

かぬうちに変わつてゆく。

最初は、一人称の獨白体で始まつたはずであ

る。それが、いつのまにか三人称の客觀描寫になつてしまふ。長い独白が終わつて、地の

文章に移り、作者が顔を出して語りはじめた

のか。それとも、独白はまだ続いている、そ

のまゝにか立ち消えになつてしまふ。では終わつたのかと思うと、思いがけないところで、続きたかと思うと、決して忘れてはいけないので。そうかと思うと、突然に「人相術」にも解釈可能である。



シャノワール・カフェへようこそ

■シャノワール・カフェグループ(るな工房・STUDIO Fitz)では、「商業出版」から「自費出版」まで、企画・編集・製作・DTP・装幀・デザインなど、出版全般に関して請け負っております。ぜひ一度ご相談ください。「La Vue」「カルチャー・レビュー」発行元です。

■TEL/FAX 06-6320-6426 E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp

■http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

